

三、両都市の自治体機関の前述の交流は、次の交流の方法によって実施される。

代表団、個々の代表者の交流  
同じく相互の選達の方法によって  
即ち 展覧会 (次のページへ)

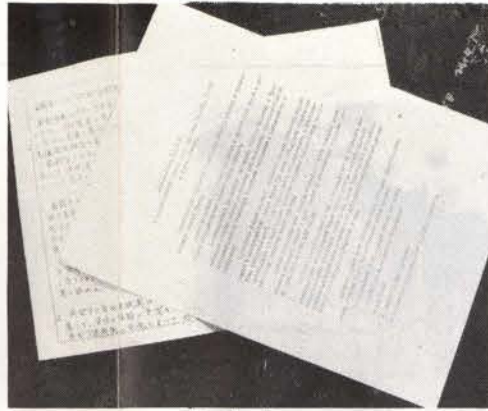
二、両都市の自治体機関は、相互の希望を考慮して、労働の経験の交流を實行する。

両自治体機関の交流によって都市建設、公共サービス、日常生活サービス、保健、国民教育、文化スポーツ等、両都市の生活の分野を理解する。

一、留萌市とウラン・ウデ市勤労者代表員ソビエト執行委員会(以下各項において「自治体機関」と称する)とは、両都市間の友好関係を発展させるためなかねばならぬ交流、連絡、協力を實現する。

留萌とウラン・ウデの両都市の自治体機関は、両都市の住民が相互にお互いの生活を知り合うことに全力をあげて助成することを必要と認める。

### 協定書の内容



協定文



レーニンの像



協定書に署名をする原田市長



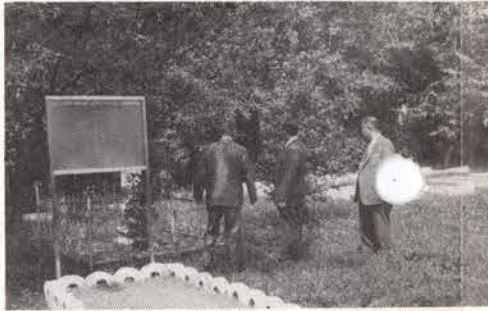
第二次世界大戦記念碑



10月革命50周年記念通り



ウラン・ウデの結婚式



ウラン・ウデ日本人墓地



ウラン・ウデ駅



ルモイ  
ウラン・ウデ  
РУМОЙ—УЛАН-УДЭ

## 姉妹都市ウラン・ウデ と正式に縁結び



留萌



### 私のウラン・ウデ旅行記

留萌市長 原田栄一

姉妹都市を結ぶことになったウラン・ウデ市を、私たちが正式に訪問することになったのは、七月一日でした。

とにかく私たち一行五人(原田市長・堀松議長・黒江日ソ協会留萌支部長・通訳など)が、ウラン・ウデ市に入った初の外国人であると聞かされて驚いたが、その歓迎ぶりも盛大でした。

姉妹都市を結ぶことになったウラン・ウデ市は、ブライヤード自治共和国(面積三十六万平方キロメートルで日本列島とほぼ同じ)の首都で人口は二十六万人。

市内は、大きく分けて三地区による行政区分がされており、その中心になっているのがソビエト地区と呼ばれている。

ウラン・ウデ市は、シベリヤ鉄道の拠点都市として栄えてきたが現在なお一般外国人に対しては未解放都市となっており、日本の政府機関が二、三度訪れたことが伝えられているが、革命後外国人として当市に入ったのは、我々一行が最初といつてよい、といわれる。

七月一日 結婚式場を訪問。ピオニール野外保育所を訪問。民族祭前夜祭に招待を受ける。

なにして、年間雨量二、三百ミリで日本の大雨の一日分、冬は零下五十度に達するという。雪は十センチぐらいで樹木を大切にすることは、大陸に無限に広がる森林をもちながら、育てることの困難さを身にしみていからである。

夕方、スルハルバン祭(民族祭)に招待されたが、私たちは正面貴賓席に座らされた。

スタジアムの構造は、プロ野球の球場のような造りでもあり国立競技場のような感じもする。

モスコイからの国営演劇陣の演技に数々の観客が手をたたいた。

七月二日 民族祭を訪問する。

朝スルハルバン祭会場に向う。閣僚会議議長(共和国の総理大臣にあたる)に会い歓迎される。

競技内容は、乗馬やレスリングのような力技が行なわれる。

とくに、十二・三才の少年が裸の暴れ馬に飛び乗り、そのたずなさばきには驚いたものです。

午後、汽車に乗るとなんと特別列車であり、三十人の宴会ができるサロンがあり、一人一部屋などもついており、コックも付いて、スピーチとコニヤックの乾杯せめにあい閉口する。

七月三日 バイカル湖に着く。

バイカル湖に着くとその大きさに目を見張る。

湖という感じはなく、海という感じがする。

ここでバイカル湖を紹介してみることにはしましょう。

透明度と水深は世界一、長さは六百五十キロメートル、巾三十キロメートルから七十キロメートル面積は三万三千平方キロメートルで、四国の二倍近い。湖岸を廻れば松島の風景とか、白砂青松の白浜、奇岩等に富んだ断崖等大観光地である。

七月四日 全ソ科学アカデミーシベリヤ分院を訪問、文化大学ソビエト社会主義共和国閣僚を訪問、イボレーガ実験農場を訪問、ダツァン教会訪問。

科学アカデミーシベリヤ分院ブライヤード支部長を訪れた。

ここは資源調査、地質、産業経済開発の基礎となるセンターである。ウラル方面の石と同種のいろいろな石の標本を見せられたが、私たちにはいずれも大理石に見える。

顕微鏡で、昨日見たバイカルの砂を見せてくれたがルビーのように見えた。

(次のページに続きます)



音楽殿堂